

活動報告書

報告者氏名：青木高光

所属： 稲荷山養護学校

記録日：H27年2月21日

【対象児の情報】

○中学部2学年

○障害と困難の内容

知的障がいを伴う自閉症

- ・ 大声や他害行為などの不適応行動がある。
- ・ 発語が無く、明確な意志表示ができない。

【活動目的】

○ 当初のねらい

- ・ スケジュールや手順を理解した上で、自分から好きな活動に一定時間取り組むことができるようになる。
- ・ 補助手段を用いて、1語文での自発的な要求表出ができるようになる。

○実施期間 H26年4月～H27年2月

○実施者 青木高光

○実施者と対象児の関係 自立活動専任として週に2回自立活動を中心に個別指導

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・ 周囲の状況や、教師の声がけを手がかりにして活動しているが、自分で流れを理解して楽しく取り組める活動が殆どない。活動中も大声を上げたり、手足で大きな音を立てたりという行動が見られる。

→スケジュール理解が必要

- ・ 明確な意思表示手段がない。→表出手段の保障が必要
- ・ 大きな声や音をたてる不適応行動、突然隣の人を叩いたりする他害行為がある。→背景の分析と誤学習の修正、代替行為の学習が必要
- ・ 昨年度明確な導入計画や目標がないままにタブレットを与えられたため、YouTubeを観たり、無目的にタップしたりするだけといった使い方になっている。→iPadの再導入の手だてが必要

○活動の具体的内容

スケジュール理解のための取り組み

- ① 昨年度末から学級で取り組んでもらっている、3日分のスケジュール提示を徹底する
→それによって見通しをもって活動できるようにする。個別の指導の場面でも、スケジュールをその場で描きながら伝えることで、視覚的に手がかりを得られるようにする。それによって得る安心感をベースに生活できるようにする。
- ② 順次シンボル表示と音声FBのある手順表アプリに切り替える
→それを手がかりに活動できるようにしていく（自分で変更、修正できるスケジュールとして活用）

表出手段形成のための取り組み

- ① 自分の欲しいものや、やりたい活動を、写真とイラストの指さしで伝える場面を仕組んでいく（主に個別指導の中で。昨年度から取り組んでいる感覚統合や遊びの場面で順次導入していく）。
- ② 手順表アプリの操作を自分で行うことで、次の活動を自分で決定できる状況を作る。

不適応行動に関する誤学習の修正

- ① 評価される活動と、不適応行動との違いを、身体プロンプトや視覚支援を用いて理解できるようにしていく。大声を出しそうになったら頬を指差す、他害行為をしそうになったらハイタッチをする、など他の動きに切り替えていく。切り替えられたら即時強化し、推測される「訴えたいこと」「やりたいこと」を、シンボルの中から選べるよう提示する。
- ② 学級、家庭と連携してトークンエコノミーを導入し、褒められる場面を意図的に増やして行く。トークンは「できたねシール」、バックアップ強化子は休日のおやつなどを用いる。
- ③ 写真系のアプリを活用し、トークンを視覚的にタブレット内で表示する。それによって学校と家庭で同じ行動が認められることを理解できるようにしていく。

iPad の再導入

- ① 家庭から持ち込んでいる iPad と見た目では区別できるように、学習用 iPad には形や色に特徴があるケースをつける。
- ② 最初はアクセスガイドの設定で他のアプリが使えないようにする。
- ③ 使用場面をスケジュールの中で明確に伝える。

○対象児の事後の変化

スケジュール理解のための取り組み

- ① 4月に担任が主任を含め大幅に入れ替わったため、引き継ぎがうまくいか懸念されたが、これまでの取り組みに理解して、視覚的に伝えることを学級でも心がけてくれた。スケジュールは敢えて手書きの物を使い、学級での実践のハードルを下げた。学級担任が積極的にスケジュールを提示してくれたので、あらかじめ伝えて活動への切り替えはスムーズになっていった。
- ② ①が順調に進んだことで、個別の学習への見通しがもて、意欲が高まった。スケジュールの○つけを自分で完璧に行えることが確認できた段階で、DropTalk HD のスケジュール機能に移行した。手書きのスケジュールは描きながら予定を伝え、DropTalk HD では、シンボルを割り当て、音声 FB を聞いてもらいながら予定を確認した。
- ③ 個別の学習では DropTalk HD による提示。学級では担任が提示する、印刷や手書きによるスケジュールを並行して活用。提示の際に選択肢を入れて、その場で選ぶこともスムーズになった。



DropTalk HD

第1期 スケジュール活用定着期（昨年度末～本年度5月）



「学級担任と朝のスケジュール確認」



「実施者との個別学習の様子」



「課題をクリアして、自分で○つけ」

第2期 スケジュールの iPad への移行期 (本年度6月～10月)

1回目から違和感無く活動でき、2回目からはすぐに自分でチェックボックスに完了チェックを入れられるようになった。



「学習場面での提示を iPad に変更」



「運動中は離れた場所に置いたが、終了すると自分からチェック」



第3期 スケジュール提示方法と理解の定着期 (本年度11月以降)

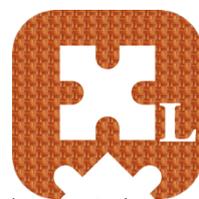


活動の切り替えの場面での、選択肢を提示の様子

表出手段形成のための取り組み

- ① 自分の好みを伝える学習の一つとして、昨年度末から少しずつ取り入れていた大好きなパズルアプリを使い、以下のような活動を行った。

ウェブの画像検索で「ラーメン」「ハンバーグ」など好きな語彙を入れる(この際の語彙確認は教師側から「ハンバーグ?」「お寿司?」などと聞き、うなずく→その後絵カードからの選択に移行)
→検索結果の画像の中から好みの物を選ぶ
→画像を「写真」に保存する
→ジグソーパズルメーカー for iPad Lite (右図) でパズルにする
→パズルで遊ぶ



ジグソーパズルメーカー
for iPad Lite

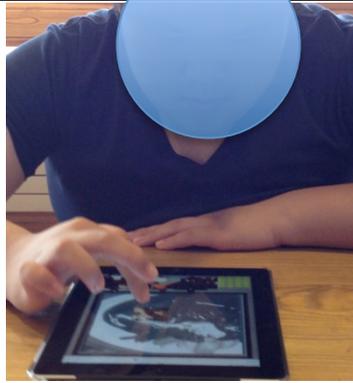
このような流れで、複数の写真の中から好きな物を選ぶ、選んだことを身振りや声(う!などの短い発声)で教師に伝える、その画像をアプリから呼び出してパズルにする、パズルで遊ぶ、という活動が自分から進められるようになった。

「自分の欲しいものや、やりたい活動を、写真とイラストの指さしで伝える」という目標の基盤になる活動になった。

- ② 上記①の活動を「次の活動を自分で決定できる状況」作りの一つとして取り入れたこともあってか、DropTalk HD の予定表の操作や内容の選択も行えるようになった。



「多数の画像の中から好みを選ぶ」



「選んだ画像でパズル」



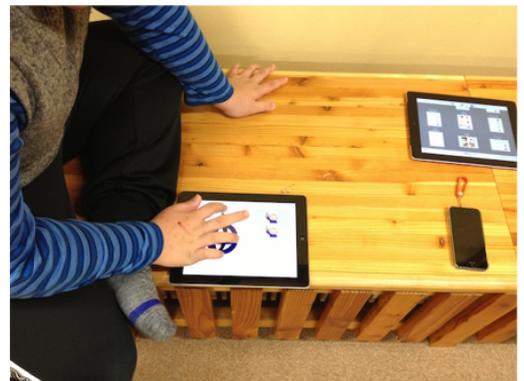
「スケジュールの中で楽しむ」



個別の学習での順番の入れ替え

不適応行動に関する誤学習の修正

- ① 大声を出しそうになったら頬を指差す、他害行為をしそうになったらハイタッチをするという動きを、個別の時間で伝えた。負荷がかかる学習（運動や絵カードのマッチングなど）の途中や後で、不満や不快の表現として現れそうになった際に、その動きに切り替え、できたら即時強化する取り組みを行った（同様の行為が多くあった寄宿舎でも取り入れてもらった）。すべての不適応行動がなくなったわけではないが（エビデンス参照）、適切な表現をすれば、自分が望む活動が選択できるという状況が理解できてきた。
- ② 望ましい行動に切り替えられた際のトークンとして「できたね！」シールを用いた。家庭との連携はまだできていないので、バックアップ強化子は、校内での活動で完結するもの（例：好きなさんぼを活動にプラスする）にした。
- ③ 続けて Keynote で、トークンを視覚的にタブレット内で表示し、タッチすると「できたね！」が現れるようにした。特に操作に困ることはなく、活動の区切りごとに画面にタッチして確認している



iPad の再導入

- ① 教室に置いてある、家庭から持ち込んだ iPad は、今でもすぐに動画を見始める姿がある。しかし、学習用 iPad は導入時に何度かホームボタンを押して、他のアプリに切り替えたり、動画アプリを探したりする姿が見られただけで、すぐにそういった行為は無くなった。
- ② 活用場面や使用方法を明確に区別することで「iPad=遊び道具」

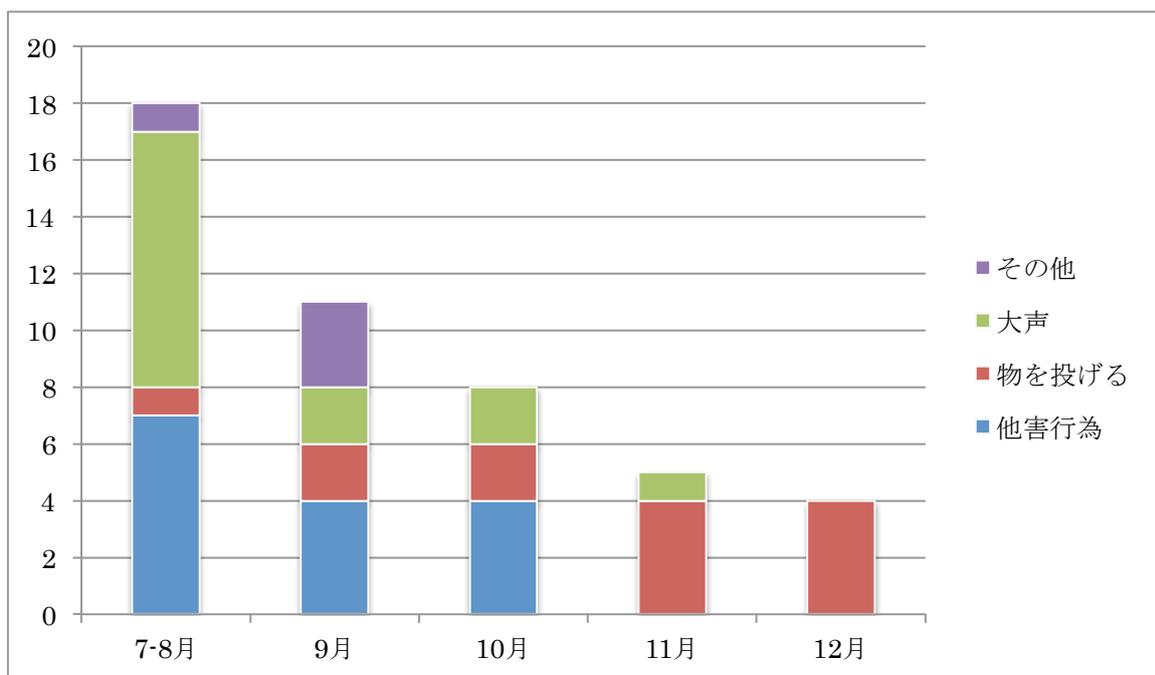


という一種の刷り込みは、少なくともこのケースでは取り除けることが分かった。

- ③ 予想以上に iPad の使い分けが上手くできたので、次の段階としては逆に、一つの iPad の中に趣味と学習のアプリを共存させた。スケジュール提示の3期とほぼ同じタイミングで、ドック部分に DropTalk HD を配置した。スケジュールキャンバスで活動を確認・提示したり、完了のチェックを行ったりする際に、他のアプリに切り替えるような動きは全くない。移行はほぼ意図通りにできたと考えられる。

5 報告者の気づきとエビデンス

この実践は「スケジュールの理解」による安定と「表出手段の形成」による安心感・満足感、周囲への信頼感が一体となって「不適応行動」の減少が期待できる、という考えが基盤になっている。個々の取り組みの個別の効果を評価するには、より詳細な検討が必要であるが、以下の表に記した通り、実践が本格的になった今年度後半に、不適応行動数が明らかに減少したことは確認できた。



今後の課題としては、11月以降にも残っている「物をなげる行為」の背景要因の分析が必要である。私見としては、これは「拒否」の表現であると考えている。つまり「要求・選択」の手段は獲得できつつあるが、実際に活動を始めてからの「拒否」の手段が定着していないために起こっていると考えられる。

中間報告や成果報告会で紹介したエピソードに「スケジュールを破る」行為がある。これは、対象生に対してのスケジュール提示を導入した時期に、週間スケジュールにあった「病院」を破ることで、リハビリに通うことへの拒否感を表現したものである。

提示された活動であれば、嫌なものでも取り組んでしまい、拒否ができずに苦しんでしまう傾向のある対象生に対して、適切な拒否の方法を獲得してもらうこと、そのための環境を整えることが今後の課題である。タブレットを用いて安定し豊かになってきた活動をより充実させるためにも、その点を今後重点的な検討課題としていきたい。

